

THE ROTARY CLUB OF NAGOYA-CHIKUSA



WEEKLY

なごや ちくさ

題字 黒野清宇

名古屋千種ロータリークラブ
 承認 1982年 8月24日
 例会日 火曜日 12:30
 例会場 愛知厚生年金会館
 事務局 TEL763-5110 FAX763-5121
 会長 小坂井 盛朗
 幹事 舎人 経昭
 会報・雑誌委員長 伊藤 健文

No. 28

手を貸そう

Lend a Hand

2003~2004年度 RI会長 ジョナサン・B・マジアベ

きょうの例会

第1030回 平成16年 2月24日(火)

東名古屋分区 I M

ホストクラブ 名古屋錦ロータリークラブ
 会場 ウェスティンナゴヤキャッスルホテル

先週の記録

第1029回 平成16年 2月17日(火)

晴

◆“我等の生業”

◆齊唱 “四つのテスト”

◆出席報告

会員	65(55)名	出席	40名
出席率	72.73%		
前々回	2月2日(修正出席率)	94.74%	

舎人幹事報告

1. 本日例会終了後、理事役員会を開催致しますので理事役員の方は2階オーキートルームにお集まり下さい。
2. 次回例会は時間と場所を変更し、I Mを3時よりウェスティンナゴヤキャッスルホテルにて開催致しますので、お間違いの無いようご出席下さい。

鈴木ロータリー運営委員報告

皆様既に御存じのように2005年日本国際博覧会の略称：愛知万博、愛称：愛・地球博でテーマは自然の叡智、開催期間は2005年3月25日～9月25日となっております。

現在万博会場のボランティアを3月31日まで募集しております。年齢は15才以上の方で活動期間5日以上となっておりますのでお知り合いの方にお声をかけていただきますようお願い申し上げます。

小坂井会長挨拶

川の向こうの合宿使役

いつ頃だったか、二十人位でラーゲルよりだいぶ離れた川の向こうに使役に駆り出された時の事である。

我々は丸木の校倉作りの小屋に寝起きした。仕事はトラクター用の水運びから、農耕雑用である。何しろ、広い農地だ。その中のほんの一区切りの農地をトラクターで耕すのだが、そのトラクターが真っ直ぐに豆粒位になるまで行って戻っての繰り返しだがその行く先にドラム缶が置いてある。トラクターの水冷式のエンジンを冷す為の水槽である。

一番大変な作業は、川の水をくみ天秤棒で石油缶二ヶに入れた水をかついドラム缶まで運ぶ長い道のりの大変キツイ仕事である。

しかし伐採よりははるかに良い仕事で、近くの外蒙古人とも自由に話をしたり、交流ができた。彼らも決して綺麗な恰好はしていない捕虜の我々と大して変わらない位の服装だ。しかも彼らは捕虜を蔑視するような気が少しもしないのだ。

慣れるにつれて物々交換が始まった。彼らは羊の乳を常飲するが、それをお茶割りにして飲む。我々から見るとわざわざ羊乳をお茶で薄めて飲む事は考えられないのだが、お茶は高貴なビタミン補給の主役を努める物と信じられているようで我々は軍隊用の乾燥茶を羊乳と交換した。始めの内は蒙古人のお茶に対する認識価値が判らない為、我々の基準でお茶を差し出したがびっくりする位沢山の羊の乳を差し出され皆大喜びで羊乳をガブ飲みした。

その内、手持ちの乾燥茶も少なくなって来た為皆で「乾燥茶をそのまま交換するのはつまらんど。お茶の嵩を増やそう」という事になった。乾燥茶をほぐし、口に水をふくんで霧状に吹き掛け、乾燥したお茶を伸ばせるだけ伸ばするのである。それを一斗缶の蓋に乗せ火に掛け、ほど良く煎ると香ばしい匂いが立ち込める。焙じ終わったお茶をなるべく嵩張るように紙袋に入れもっともらしく蒙古人のところへ持って行って、「これは今までのお茶と違って高級品で日本でも高貴な身分の人しか飲めないお茶だ！これを分けてやるから羊の乳では駄目だ羊の肉と交換しろ」と申し入れた。

外蒙古人は袋を開けて鼻を近づけ煎り立てのお茶の香りが部屋中に拡がり満足そうにうなずいて、羊肉の骨付きのまま一本を差し出した。

「ハラショー」

その日の夕食は久々に羊肉入りのスープ。皆が「お茶じゃ腹の足しにならないものなあ」と大はしゃぎだった。とにかく美味しかった。

蒙古人はものすごく眼が良い。我々には何も見えないのに彼らははるか彼方を指さして、「帰ってきた。」と叫ぶ、遠目がきくのは双眼鏡並だ。

満州西南部ノモンハン近くの蒙古人と満州国健在の頃、体験した事だ。

或る日放牧の群からハグレタのかサボったのか牧童の眼をカスめて我々の畑仕事のところへ一匹の羊がフラッと現れた。「しめたっ！」と皆でアタック、羊頭をショベルでコン。早速畑の一隅を掘って羊を埋葬、そ知らぬ顔で畑仕事。ところが驚いた事にいつものわびしい夕食が済んで、皆がゴロ寝をしているところへ蒙古人（羊の牧童）がやって来て、羊が一頭足りない知らないか？と言って探しに来たのである。

何千・何万頭と放牧させながら、たったの一頭少ない・いなくなったと言って探しに来るとはどうした事か。数えているのだろうか？先述の遠眼と共に不思議の一つである。

勿論、我々は真顔で「ニズナイ」（知らない）と口々に答えると、「ヤッポンスキークーショイ？」（日本人が食ったのだろう）と言って部屋中を見て廻り、なかなか立ち去らないのである。その内蒙古人はあきらめたのか首を傾けながら引き上げて行った。やれやれと皆が顔を見合わせもう少し後にしようと狸寝入りをしたのである。

一時間位たってもう良いだろう「オイ探索!!」。「大丈夫だ良いぞ」と押し殺した声。宿舎をそっと抜け出して昼間、畑に埋めた羊を掘り起こし、河原へ運び出して肥後守という折り畳みナイフ一丁で羊の解剖を見事にやってのける名人に任せる。

肉はバケツ二ヶに一杯になりそれを宿舎の屋根裏へそっと隠しに戻る奴、骨や臓物を皮にくるんで深みに流し、河原の証拠隠滅にたずさわる奴、深夜月明かりでの隠密作業はしゅくしゅくと手際よく進められるのである。

この肉は翌日監視が来るまでに朝食として食べてしまわなければならない。

いつもならイモの入ったお粥なのだが、肉の間に米粒が混ざりうまいうまいと連発しながら正にむしゃぶりつく。調味料一つ、塩味一つついていない大変な代物だったが、とにかくうまかった。誰かが「オイ！残すなよ証拠になる」と言う声。しかしそんな心配は全く不要。食器はどれもなめたように綺麗になっていた。盆と正月と一緒に来たような楽しい朝食の一刻であった。

その後も哀れ日本兵のお腹の中に入って成仏したはぐれ羊がちょこちょこあったが二回目からは一度に食べる事はなく数回に分けて食する程のゆとりが出たものであった。

◆卓話 “出水の鶴”

会員 森 幸一君

皆様コンニチハ！

5年前には仕事の関係上で省エネと環境の話をさせて頂きました。

本日は私の出身でもあります鹿児島県出水市の鶴の話で一組のカップルの本当にあった愛の話をさせて頂きます。鶴は昔から大変縁起が良いと古くから大切に守られカンザシや鏡、着物などの絵として愛用されております。

出水には10月中過ぎにシベリアから飛来し3月頃まで過ごします。その数は13,000羽以上にもなり一度に来るのではなく用心深い性質からまずは数羽が飛来し安全が確認されれば数百羽が舞い降りその後も続きます。

今から22年前のある時、カップルのオスが傷つき鶴の世話役に捕獲されました。メスの鶴は心配そうに捕獲小屋の周りから離れようとしなかったそうです。3月にはシベリアに帰る時期となりますが一向に帰る気配がありません。晴天の季節風である上昇気流にのらないと高い山を越えることができないことも予想され捕獲して守ることも考えられましたが失敗に終わり、今度は無理やりシベリアに追い返す作戦にでたそうですがこれも駄目だったとのことでした。

既に全ての鶴は帰ってしまい世話役も諦めの境地で見守るしかありませんでした。ところが5月過ぎのある晴天の朝、オス鶴の小屋の屋根に停まり大きな鳴き声を交わしていたので近所の人々もその鳴き声に集まったそうです。その後飛び去って行きました。

何を話したのでしょうか？必ず帰るから待っていてね！といったのか？俺のことは心配しないでいいから君は帰れといったのか？

世話役は、一羽でシベリアまでは二週間の旅として、無理があり又気流にも乗れないことから途中で死んでしまうのではと無事を祈るばかりでした。それから五ヶ月が過ぎ、その年の10月の中ごろ数羽の偵察隊がやってきました。

その一番隊の中の一羽が列を離れオスのいる小屋に舞い降りたそうです。心配していたメスの鶴でした。カップルは歓喜の声を上げ、その後は出水で仲良く過ごし3月にはカップルでシベリアに帰り、その年の10月には子供と一緒に飛来してきたとのことでした。

鶴は出水から韓国、北朝鮮、中国、ロシアと飛んでいき国境がありません。国境がないのが自然なのだな～と考えさせられます。

我々の生活を豊かにするエネルギーが実は環境を破壊し生態系を壊し生物の住めない状況へと進んで行く中で何か緊急に考える必要があるのではないかと改めて考えさせられました。

◆ニコボックスは次回掲載させて頂きます。

次回例会

平成16年3月2日(火)

講演 “遠くて近い ロシア”

国際親善奨学生 メテリョワ・ナターリアさん